

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 北海道教育委員会

所在地 北海道札幌市中央区北3条西7丁目

代表者職氏名 教育長 立川 宏

平成26年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

平成26年4月1日 ～ 平成27年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	ほっかいどうすつつこうとうがっこう	ふりがな	きたむら としたか
学校名	北海道寿都高等学校	校長名	北村 敏 貴
ふりがな	すつつちょうりつすつつちゅうがっこう	ふりがな	なかむら としき
学校名	寿都町立寿都中学校	校長名	中村 寿 樹
ふりがな	すつつちょうりつすつつしょうがっこう	ふりがな	ね い あきお
学校名	寿都町立寿都小学校	校長名	根井 朗 夫
ふりがな	すつつちょうりつおしよろしょうがっこう	ふりがな	やまもと やすひろ
学校名	寿都町立潮路小学校	校長名	山本 康 博

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校高学年における教科化に向けた指導と評価の考察及び小学校高学年、中学校、高等学校における CAN-DO リストの形での学習到達目標を明確化し、英語による言語活動を多く設定したカリキュラムを考察する。

(2) 研究の概要

- ① 小学校第3、第4学年の外国語活動型、第5、第6学年の教科型の学習内容及び評価の研究
- ② 中学校・高等学校の目標及び内容の高度化を踏まえた小・中・高等学校10年間の系統性のあるシラバスの作成と CAN-DO リストを生かした評価や評価方法の研究
- ③ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の開発・作成
- ④ 校内での英語の使用場面を意図的に多く設定するための、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などを活用したモジュール型の指導

(3) 現状の分析と仮説等

① 現状の分析と研究の目的

平成 19 年度から 3 年生～6 年生で英語を行い、平成 23 年度から教育課程特例校として、外国語活動を教育課程に取り入れ実践しているため、英語を話すことに抵抗の少ない児童生徒が多いが、中学校では「読むこと」や「書くこと」、文法の指導が行われるため、英語学習への苦手意識を感じる生徒が少なくない。

また、全国学力・学習状況調査の結果から家庭学習の時間が少ないことやテスト等の結果から全国平均と比較し、特に、「書くこと」に課題がある生徒が多い。

そのため、CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるようなオリジナル教材を開発・作成するとともに、小・中・高の 10 年間を見通した、系統性のあるシラバスの作成を目指していく。

また、小学校第 5、6 学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校での英語授業の内容との接続を踏まえた学習内容となるように配慮する。

さらに、校内での英語使用の場면을意図的に多く設定するため、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでも単なる文法事項の指導や単語テストなどではなく、言語活動を取り入れるなどしてその効果を検証し、今後のモジュール型の英語授業の設定の方法を考察する。

② 研究仮説

ア 小学校第 3、4 学年の外国語活動で英語に慣れ親しむことにより、第 5、6 学年の教科型の学習において、「話すこと」「聞くこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の円滑な導入を図ることができ、さらには中学校においてより多様で高度な学習活動を展開することができる。

イ 小・中・高 10 年間の系統性のあるシラバスを作成することにより、指導内容の系統性や指導方法の継続性、目標の一貫性をもたせることができるとともに、CAN-DO リストを生かした評価や評価方法を工夫することにより、指導の改善につなげることができる。

ウ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させたオリジナル教材を作成・開発し、授業で活用することにより、児童生徒は英語の運用能力の向上を実感でき、外国語活動等への意欲化につなげることができる。

エ A L T や地域人材を活用して、授業はもとより、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間など短い時間内での英語使用の場면을意図的に多く設定することにより、短い時間での言語活動の有効性を検証し、今後のモジュール型の英語授業の展開を考察することができる。

③ 研究成果の評価方法

ア アンケートによる評価や 4 技能の能力を図る定期的な学力調査に加え、英検などの外部試験などの結果の分析

イ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う各活動の内容を関連させた目標と指導と評価の一体化

ウ 小学校第 5、6 学年における評価規準の作成と授業評価の実施

エ A L T 等の複数による評価や児童生徒に向けたアンケートの実施

オ 各年度における公開研究会や運営指導委員会での指導助言

(4) 研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 2 コマ	第 3・4 学年 2 コマ
②小学校 教科型	第 5・6 学年 1 コマ	第 5・6 学年 2 コマ	第 5・6 学年 3 コマ	第 5・6 学年 3 コマ

(5) 研究計画

第1年次		
<p>小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3学年から第6学年までの4年間の系統性・継続性のある指導計画を作成する。 ・第5、6学年ではCAN-DOリストを作成して身に付けさせたい能力を明確にし、指導と評価の研究を行う。 ・第3、4学年では、「聞くこと」「話すこと」の活動を中心とした身近で基本的な英語表現に慣れ親しむ活動を行う。また、Hi, friends、準拠デジタル教材の効果的な活用について研究する。 ・第5、6学年では、「読むこと」「書くこと」の活動を導入し、第3、4学年で慣れ親しんだ英語の表現を文字として触れることにより正確な英語の表現や理解につなげる。その際、第5学年では、cook、lookなどの平易な単語を発音と綴りとを関係付けて指導を行い、第6学年では、平易な文を読んだり書いたりできる英語力を培う。 ・ALTや地域人材を活用して町独自のイングリッシュキャンプを開催し、体験型英語学習の成果や、英語学習への意識の変化を検証する（以後4年間継続）。 ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。 ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>中学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校で外国語活動を受けている生徒に対応した英語による授業を基本とした指導方法の工夫改善により、コミュニケーション能力の基礎を育成する。 ・TBLT (Task-based Language Teaching)の視点から、各学年で扱われる文法事項を習得して活用するのに役立つオリジナルのタスク集を作成する。 ・CAN-DOリストの能力記述文の内容とタスクの内容に整合性をもたせる。 ・CAN-DOリストを工夫改善し、評価や評価方法の改善充実を図る。 ・小学校の教育課程づくりに参画する。 ・小学校英語の早期化・高度化を踏まえた中学校の目標や内容、指導計画を研究する。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>高等学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等を通じた中高の連続性を踏まえた指導計画を作成する。 ・CAN-DOリストの改善、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。 ・中高の連続性を踏まえた高等学校導入期の学習内容や指導方法等の検討を行うとともに、中学校の教育課程づくりに参画する。 ・中学校の目標や内容の高度化を踏まえ、発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導計画について研究する。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。
<p>○効果的な英語による英語指導を目指し、小学校と中学校の授業におけるクラスルームイングリッシュや、英語による指示表現などの統一化や、学年進行での追加・発展の内容を考察していく。</p> <p>○英語検定などによる客観的な分析を行う。その結果を、指導内容や指導方法に反映する。CAN-DOリストによる自己評価とのずれも検証する（以後、4年間随時実施し、検証を継続する）</p>		

第2年次

小学校

- ・英語によるコミュニケーション能力や意欲をはぐくむため、小学校第3学年から第6学年までの4年間の系統性・継続性のある指導計画を改善する。
- ・第3、4学年では「聞くこと」「話すこと」を中心に、自己紹介など積極的に自らのことを英語で発信できる力を培う活動を行う。また、Hi, friends、準拠デジタル教材の効果的な活用について研究する。
- ・第5、6学年では、韓国やシンガポールなど、小学校英語教育の先進国の教材等を参考にし、文字指導の内容を検討する。その際、第5学年では、**cake**、**lake**などの平易な単語を発音と綴りとを関係付けて指導を行い、第6学年では、平易な文を正しく読んだり書いたりできる英語運用能力を培う。
- ・CAN-DOリストを用いた自己評価と教員による評価のずれや一致について考察する。
- ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。
- ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

中学校

- ・小学校で教科化された英語教育を受けた生徒に対応した英語による授業を基本とした指導方法や、オリジナルのタスク集を活用した授業展開を工夫する。
- ・CAN-DOリストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DOリストを改善する。
- ・小学校段階での外国語活動の学習内容を踏まえ、英語による自己紹介、自分の住む町の紹介など、発信型のタスクの在り方を考察する。
- ・小学校の教育課程の改善に参画する。
- ・中学生版イングリッシュキャンプの実施を検討する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

高等学校

- ・乗り入れ授業、公開授業等を通した中高の連続性を踏まえた指導計画の実践を行う。
- ・CAN-DOリストの工夫改善を行う。
- ・中高の連続性を踏まえた高等学校導入期の学習内容や指導方法等を実践するとともに、中学校の教育課程の改善に参画する。
- ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導内容を実践する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

定期的に小学校、中学校の英語担当者が相互の学校の授業に乗り入れる。それにより、9年間を見通した指導内容を検討するのに役立つだけでなく、多くの教員が関わることで個に応じた指導（より細かな習熟度別少人数指導）を検証していく。

第3年次

小学校

- ・第3、4学年では「聞くこと」「話すこと」を中心に、興味・関心のあるものを話題として自らのことを英語で発信できる力を培う活動を行う。
- ・第3、4学年では、外国語活動の趣旨を踏まえた簡単な「読むこと」「書くこと」の言語活動を試行する。
- ・第5、6学年では、これまで2年間の成果で明らかとなる課題を基に教科型の指導計画の改善を図るとともに、中学校での領域ごとの言語活動なども参考にし、4技能の育成を図る。
- ・中学校での評価の観点、評価方法を参考にし、小学校第5、6学年のCAN-DOリストの見直しも含め、効果的な評価の在り方を検証する。
- ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。
- ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

中学校

- ・英語による授業を基本とした指導方法の研究を行う。
- ・CAN-DO リストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DO リストを改善する。
- ・習熟度別少人数指導の時数を多くするなどし、努力を要すると判断されるコースを中心に、基礎的・基本的な内容の定着に努める。
- ・朝自習の時間や、放課後学習の時間なども活用し、身近な言語の使用場面を定期的に設定し、言語活動の充実に努める。
- ・これまでの「発信型英語教育」の総まとめとして、道徳、総合的な学習の時間との連携を図り、生徒の手による町を紹介する英語ホームページやガイドブックの作成を行う。
- ・小学校の教育課程の改善に参画する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

高等学校

- ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等をおした小中高の連続性を踏まえた指導内容やCAN-DOリストの検証、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。
- ・中高の連続性を踏まえた高等学校導入期の学習内容や指導方法等を工夫改善するとともに、中学校の教育課程の改善に参画する。
- ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導内容について検証する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

第4年次

小学校

- ・第3、4学年では、これまでの成果を総合的にまとめ、中学年にふさわしいオリジナル教材を作成する。
- ・第5、6学年では、前年度の学習内容を発展させ、「書くこと」について、身近な場面における出来事や体験したことなどについて自分の考えや気持ちを書く活動を研究する。
- ・第5、6学年では、これまでの成果を総合的にまとめ、中学校との効果的な接続を目指したオリジナル教材の作成を目指す。
- ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。
- ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

中学校

- ・英語による授業を基本とした指導方法の研究を行う。
- ・CAN-DO リストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DO リストを改善する。
- ・CAN-DO リストによる定期的な自己評価を行い、生徒個人の課題を明確化する。
- ・第3年次目で導入する、英語ホームページやガイドブックの作成で「書くこと」の力を培うことに加え、修学旅行等の場面で、これらをもとに口頭で説明（プレゼンテーション）を行うなど、郷土の歴史や文化に関する情報を英語で発信する活動を行う。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

高等学校

- ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等をおした小中高の連続性を踏まえた指導内容やCAN-DO リストの検証、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。
- ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導計画について成果と課題を検証する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

○平成26年度の進捗状況・課題

<進捗状況>

- ・町内各学校の英語担当教員などで構成する「寿都町小中高連携学力向上推進委員会コミュニケーション推進部会」を設置。平成26年度は部会を6回開催し、研究内容や推進方法等について協議した。
- ・各小・中学校の英語担当代表教員で構成する「英語教育指導者懇談会」を2月末までに14回開催。具体的な研究内容や指導内容について協議した。
- ・大学教授、北海道教育庁後志教育局、寿都町教育委員会、町内学校管理職、PTA代表で構成する「運営指導委員会」を7月、12月、2月に開催し、本事業の助言者である北海道教育大学札幌校の萬谷隆一教授から助言を得た。
- ・町内小・中・高等学校の児童生徒の実態や授業の様子を互いに把握するため、各学校で積極的に授業を公開し、意見交流を行った。これに加え、他校種への乗り入れ授業やゲストティーチャーとしての授業への参加などを行うことで、以下の成果と課題が明らかになった。

<成果>

- ・校種間の連携について

授業参観、乗り入れ授業等をとおして、各学校の児童生徒の実態や学習内容の共通理解を図ることができた。

小学校から高等学校までの発達の段階を踏まえて各学校で使用する Classroom English を一覧としてまとめることができ、各学校の共通理解を図ることができた。

- ・指導計画の作成について

小学校から高等学校までの年間指導計画の様式を統一した。小学校の計画作成に中学校教員が加わるなどして、他校種の学習内容との関連も併記することにより、12年間の学習内容の系統性について共通理解を図り、既習事項を把握した上で授業を行うことができた。

各学校の児童生徒の実態を踏まえ、小学校から高等学校までの12年間の系統的な CAN-DO リストを作成して効果的な活用方法を検討することができた。

- ・指導方法の工夫について

大学教授の助言により、現実的な英語使用場面を想定した言語活動を重視したタスク指向型の授業である TBLT (Task-Based Language Teaching) について理解を深めることができた。

<課題>

- ・小学校における「書くこと」の指導について

今年度は、高学年において文字指導の偏った指導を行うこともあった。次年度以降、授業時数は増加することも活かし、「書くこと」「読むこと」に関する学習を行う際でも、「聞くこと」「話すこと」との有機的な関連を図った指導を工夫していく必要がある。

- ・指導方法について

中学校では、オールイングリッシュを目指した授業を行うため、教師自身の英語力の向上や、生徒の英語による言語活動の時間の増加させることを目指していく。あわせて、より現実的な場面を想定した言語活動について研究する必要がある。

- ・研究の組織体制について

研究初年度の成果や課題を踏まえ、北海道教育委員会、寿都町教育委員会、各校の加配教諭、本事業の研究担当の役割分担及び連絡系統など、研究体制をより効率的、効果的にするため、寿都町小中高連携学力向上推進委員会コミュニケーション推進部会の機能を強化する必要がある。

(6) 評価計画

<p>第1年次</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」に関する独自教材の作成とその検証 ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の導入とその検証 ・小学校第5、6学年のCAN-DO リストの作成とその検証 ・各校種の指導計画の作成とその検証 		
<p>小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動観察を主体として、各児童の活動の理解度を毎時間記録していく。ビデオなども活用し、成長の様子を客観的に捉える(授業観察)「通年」 ・CAN-DO リストに基づく自己評価を詳細に分析し、今後の指導計画の作成や指導の在り方を検討する手立てとする(自己評価)「单元ごと」 ・基本的な英単語が「読める」「書ける」か、また、「書く」「読む」活動が児童の負担になっていないか、「書く」「読む」活動を導入することで、児童の英語表現力にどのような変化があるのかを検証する(アンケート)「5月、2月」 ・町独自のイングリッシュキャンプに参加した児童の感想や、意見などを基に、体験型英語学習の在り方を検証する(以後4年間継続) ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>第5学年 児童英検ブロンズ 80%取得割合 60%</p> <p>第6学年 児童英検シルバー 80%取得割合 70%</p>	<p>中学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業を英語で行うことで、生徒の英語学習に向かう姿勢に変化があるのか、リスニング力を中心に英語力に変化があるのかを検証する(アンケート)「5月、2月」 ・習熟度別少人数指導の効果的な在り方を検証する(運営指導委員会やCAN-DO リストの活用)「通年」 ・小学校外国語活動(教科型)の授業を経験してきた生徒と、従前の生徒の英語力や英語学習に対する意識の変化を、卒業までの3年間にわたり追跡調査し、その推移を分析する(以後4年間継続する) ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>第1学年 英検5級 取得割合 50%</p> <p>英検4級 取得割合 20%</p> <p>第2学年 英検5級 取得割合 60%</p> <p>英検4級 取得割合 30%</p> <p>第3学年 英検5級 取得割合 70%</p> <p>英検4級 取得割合 40%</p> <p>英検3級 取得割合 20%</p>	<p>高等学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DOリストによる到達度の検証を4技能ごとに行い、小中との連続性を踏まえた評価の在り方について検証する(授業観察)「通年」 ・授業を英語で行うとともに、言語活動の高度化について検証する(運営指導委員会や教材研究、アンケート)「通年」 ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>第3学年 英検3級 取得割合 30%</p> <p>英検準2級 取得割合 10%</p> <p>第2学年 英検3級 取得割合 40%</p> <p>英検準2級 取得割合 15%</p> <p>第3学年 英検3級 取得割合 50%</p> <p>英検準2級 取得割合 20%</p> <p>英検2級 取得割合 10%</p>

第2年次

- ・CAN-DO リストの能力記述文と言語活動の内容を関連させた独自教材の作成・開発とその検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の開発とその検証
- ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」の領域に関して、中学校での英語授業の内容との関連の検証
- ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の効果の検証

小学校

- ・小学校第5、6学年でのCAN-DO リストに「読むこと」「書くこと」を位置付け、中学校との関連を図る(授業観察)「通年」
- ・各国の教材の改訂版と従来版を比較検討し、小学校段階にふさわしい文字指導の内容や難易度を考察する(運営指導委員会や教科書分析)「7、8月」
- ・小学校第5、6学年の授業で扱った英単語の発音、意味、綴りを理解しているかを検証する(テスト)「2月」
- ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」の導入に関する関心・意欲について検証する(アンケート)「5月、2月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第5学年 児童英検ブロンズ
80%取得割合 70%

第6学年 児童英検シルバー
80%取得割合 80%

中学校

- ・オリジナルのタスク集について、活動主体の授業の内容や成果を検討する(授業観察)「通年」
- ・発信型の英語教育を推進し、特にパフォーマンス評価を含めた「話すこと」「書くこと」の力の適切な評価の在り方(定量的な評価法)を検討する(運営指導委員会や授業観察、ALT等との複数での授業評価)「通年」
- ・イングリッシュキャンプを実施し、授業で学んだ項目を実践の場で活用することによる、英語運用能力や、英語学習に関するモチベーションの変化を検証する(観察とアンケート)「8月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年 英検5級
取得割合 60%

英検4級
取得割合 30%

第2学年 英検5級
取得割合 70%

英検4級
取得割合 40%

第3学年 英検5級
取得割合 80%

英検4級
取得割合 50%

英検3級
取得割合 30%

英検準2級
取得割合 10%

高等学校

- ・パフォーマンス評価や自己評価、相互評価をもとにコミュニケーション能力に係る変容について検証する(アンケート)「5月、2月」
- ・発表、討論、交渉等の教材研究を行い、授業実践での検証を行う(運営指導委員会や授業観察)「通年」
- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できるような教材を検証する(教材研究)「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年 英検3級
取得割合 40%

英検準2級
取得割合 15%

第2学年 英検3級
取得割合 50%

英検準2級
取得割合 20%

第3学年 英検3級
取得割合 60%

英検準2級
取得割合 30%

英検2級
取得割合 15%

第3年次

- ・CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の改善と検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の検証
- ・小学校第5、6学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校での英語授業の内容との関連を踏まえた学習内容の検証
- ・短い時間での言語活動の効果の検証とモジュール型の英語授業の検証

小学校

- ・これまでの3年間で行ってきた小学校第3、4学年での言語活動の内容や難易度が、当該児童の発達段階に対して適切かを検証する（授業観察）「通年」
- ・CAN-DO リストの自己評価と、教員による評価との相違点について検証していく（授業評価）「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「関心・意欲・態度」「知識」「理解」「表現」の4観点での評価方法を検証する（授業観察等）「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「関心・意欲・態度」を定量的に評価する手法を検討する（運営指導委員会や授業観察等）「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第5学年	英語検定	5級	取得割合	20%
第6学年	英語検定	5級	取得割合	30%

中学校

- ・実質的な研究2年目を迎え、特に、効果的な習熟度別少人数指導の在り方を再検討する（授業観察とアンケート）「通年」
- ・朝自習や、放課後学習の時間も活用し、実践的な英語の運用場面を設ける際の課題を明確化し、その成果をまとめ、中学校段階で効果的なモジュール型の授業の在り方を検討する（授業観察とアンケート）「通年」
- ・生徒がアウトプットした内容の定量的な評価法を検討する（運営指導委員会や授業観察等）「通年」
- ・タスクベースの授業を継続する上で、過年度までの生徒との相違点などを検証する（アンケート）「2月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年	英検5級	取得割合	70%
	英検4級	取得割合	40%
第2学年	英検5級	取得割合	80%
	英検4級	取得割合	50%
第3学年	英検5級	取得割合	90%
	英検4級	取得割合	60%
	英検3級	取得割合	40%
	英検準2級	取得割合	20%

高等学校

- ・外部検定試験の活用やスピーキングテストの実施等によりコミュニケーション能力に関わる変容について検証する（アンケート）「10月」
- ・発表、討論、交渉等の授業について検証し、次年度の実践につなげる（教材研究）「通年」
- ・幅広い話題について抽象的内容を理解できるよう段階的に繰り返し指導することを検証する（運営指導委員会や教材研究）「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年	英検3級	取得割合	50%
	英検準2級	取得割合	20%
第2学年	英検3級	取得割合	60%
	英検準2級	取得割合	30%
	英検2級	取得割合	10%
第3学年	英検3級	取得割合	70%
	英検準2級	取得割合	40%
	英検2級	取得割合	20%

第4年次

- ・CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の検証
- ・小学校第5、6学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校における英語授業内容と関連させた学習内容の検証と、評価の方法と内容の検証
- ・校内での英語使用の場面を意図的に多く設定し、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などで言語活動を取り入れるなどして、その効果の検証と今後のモジュール型の英語授業の検証

小学校

- ・児童の活動の様子を把握し指導方法や指導内容を検証する（授業観察）
- ・児童の変容や成長の様子をビデオ等も活用して分析し、コミュニケーション能力や外国語活動へ向かう意識の変容を分析する（授業観察）「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「読むこと」「書くこと」の理解について検証する。（テスト）「10月」
- ・年間を通して児童が書いた文章を集め、詳細に分析する。（運営指導委員会やパフォーマンス評価）「12月」
- ・小学校段階での観点別評価の観点を改善し、CAN-DO リストに基づく自己評価や、教員による評価、相互評価を含めた効果的な評価の在り方を検証していく（授業観察）「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第5学年	英語検定	5級	取得割合	30%
第6学年	英語検定	5級	取得割合	40%

中学校

- ・生徒の「話す」「書く」のアウトプットの実際の様子や、外部試験などを活用した「聞く」「話す」の結果を詳細に分析し、小学校第5、6学年での教科型で英語を学んできた生徒と従前の生徒の情意面や、各領域の能力の推移を比較分析する（テストとアンケート）「12月」
- ・生徒が取り組んだホームページや、ガイドブックの作成の内容や、プレゼンテーション活動などの内容を検討することで、中学校段階にふさわしい、発信型の活動の在り方を考察する（運営指導委員会やパフォーマンス評価）「1月」
- ・実際に英語を活用する場面をより多く設定したことによる、「実際に英語でコミュニケーションを図ることができる」喜びを感じさせる手立てを考察する（アンケート）「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年	英検5級	取得割合	80%
	英検4級	取得割合	50%
第2学年	英検5級	取得割合	90%
	英検4級	取得割合	60%
第3学年	英検3級	取得割合	10%
	英検5級	取得割合	100%
	英検4級	取得割合	70%
	英検3級	取得割合	50%
	英検準2級	取得割合	30%

高等学校

- ・発表会や討論会を開催し、パフォーマンス評価等を加味しコミュニケーション能力に係る変容について評価する（アンケート）「10月」
- ・幅広い話題について抽象的内容を理解できるよう段階的な難易度を考慮した教材を検証する（運営指導委員会や教材研究）「10月」
- ・幅広い話題について抽象的な内容について討論できるように科目間の関連付けを効果的に行う（運営指導委員会や教材研究）「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

第1学年	英検3級	取得割合	60%
	英検準2級	取得割合	30%
第2学年	英検3級	取得割合	70%
	英検準2級	取得割合	40%
第3学年	英検2級	取得割合	15%
	英検3級	取得割合	80%
	英検準2級	取得割合	50%
	英検2級	取得割合	30%

○平成26年度の進捗状況・課題

<進捗状況>

本町では平成23年度から教育課程特例校として小学校第3学年から外国語活動を実施している。

平成26年度の中学校第1学年の生徒(16名)を対象に、入学直後に英検5級相当のリスニング問題を課したところ、正答率90%以上が9名、75%以上90%未満が6名、クラス平均正答率は85%という結果であり、リスニング面で高い英語力を有して中学校に入学してくることが明らかとなった。一方、中学校第2学年、第3学年対象の標準学力検査(CRT)の結果では、すべての項目で全国平均を下回り、特に、表現の能力において指導の成果が十分あがっていないことが分かった。この現状を踏まえ、評価についても研究を重ねた結果、次の成果と課題が明らかとなった。

<成果>

- ・小学校第5、6学年の独自教材の作成とその検証について

市販の中学校用教材だけでなく、小学校からの早期英語教育の先進地である韓国やシンガポールの教材なども参考にして「読むこと」「書くこと」に関する独自資料を作成し活用できた。

- ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の導入とその検証について

今年度は中学校の放課後学習会で英語の補充学習を実施し、基礎・基本の定着を図ることができた。

- ・CAN-DOリスト及び各校種の指導計画の作成とその検証について

CAN-DOリストの項目と学習活動の関連を明確にした年間指導計画を作成し、CAN-DOリストと関連を図って評価できるようにした。

<課題>

- ・小学校第5、6学年での独自教材の作成とその検証について

児童の実態や学習内容、表記方法、指導する単語の発音と綴りの関係などに留意して、適切な「読むこと」「書くこと」に関する独自教材を作成する必要がある。

- ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の導入とその検証について

各学校の実態や、日課なども考慮しながら、授業で学んだことを実際に活用する場面を設けたモジュール型の学習の導入を検討する必要がある。

- ・CAN-DOリスト及び各校種の指導計画の作成とその検証について

児童生徒にCAN-DOリストの内容を提示し、見通しをもって学習したり、理解の状況を自ら把握したりできるようにするとともに、教師が児童生徒の自己評価を参考にしながら指導の改善に活かす必要がある。

- ・外部検定試験の活用について

日本英語検定協会の実用英語技能検定を実施しており、今後、その結果を分析して児童生徒の実態を把握し、指導の改善に努める必要がある。

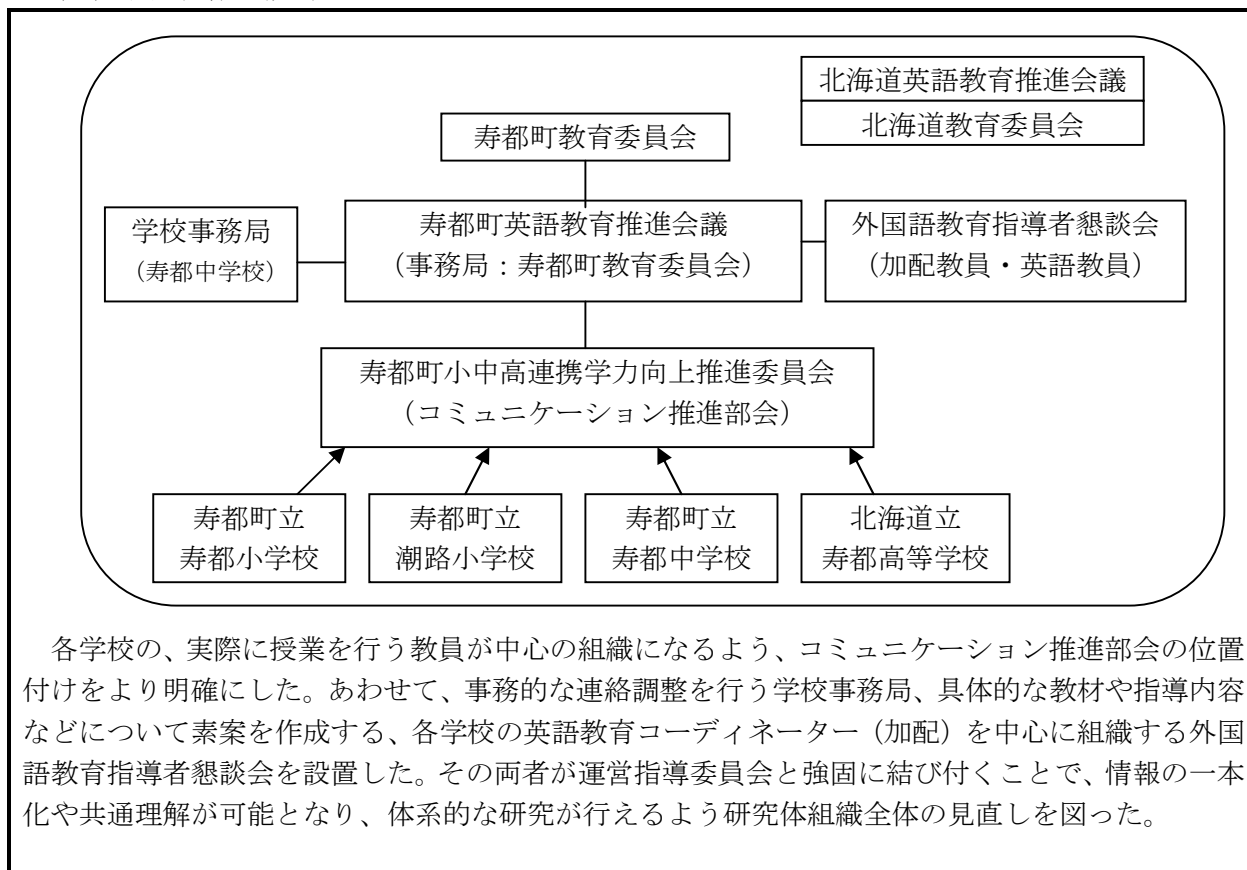
毎年、日本英語検定協会の英語能力判定テストを小学校から高等学校で実施する。平成26年度は小学校5・6年生から高等学校1年生を対象としたが、今後、年次進行で対象学年を随時拡大していく予定である。それにより、児童生徒の英語力の変容を測るとともに、「教科型の小学校外国語活動」を経験して中学校に入学してくる生徒と以前の生徒の比較分析を行っていく。

- ・児童生徒アンケートについて

児童生徒の英語学習に対する意識面の変容を見取るためのアンケート調査を実施していく。各児童生徒の英語学習に対する情意面での変化などを読み取るため、各校種間の比較ができるよう、発達の段階も踏まえた質問項目と共通質問項目を整理して作成し、実施する必要がある。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(3) 運営指導委員会

①北海道英語教育推進会議

<活動計画>

○活動計画

11月、12月、2月に会議を開催し、本事業の進捗状況、成果や課題を報告するとともに、委員から意見をいただく。

○平成26年度の進捗状況・課題

12月19日（金）開催の北海道英語教育推進会議において、寿都町の取組を説明し、委員から取組の改善・充実に向けて、文字指導の在り方、日常生活で英語に触れる環境づくり、外部人材の活用等について指導助言を受けた。

②寿都町英語教育推進会議

<活動計画>

平成26年5月	第1回運営指導委員会	内容	授業研修及び研究の方向性の指導助言
平成26年10月	第2回運営指導委員会（兼実践交流会又は公開研究会）	内容	授業研修及び研究の方向性の指導助言
平成27年2月	第3回運営指導委員会	内容	研究評価に関する指導助言

5. 年間事業経過

月		強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	3日	全体会の開催(英語指定事業説明会) (兼第1回外国語教育指導者懇談会)	
	1日～10日	研究内容、具体的取組の確認 (10日第2回外国語教育指導者懇談会)	
5月	19日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議	
	12日～16日	英語指導力向上事業研修への高等学校担当教諭参加	
	27日	小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業に関する説明会	
6月	6月上旬	英語検定対策	
	2日～6日	英語指導力向上事業研修への中学校担当教諭参加	
	18日	小・中学校授業研修(指導主事訪問)	
	27日	第3回外国語教育指導者懇談会	
7月	1日	小・中学校授業研修(指導主事訪問)	第1回寿都町英語教育推進会議(1日)
	6月30日～7月4日	英語指導力向上事業研修への小学校担当教諭参加	
	10日～22日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議(授業交流)	
	16日	第4回外国語教育指導者懇談会	
	26、27日	【先進校視察1】 第14回小学校英語教育学会(JES)神奈川大会に、寿都小学校三春教諭、潮路小学校佐藤教諭、寿都中学校中村教諭、町教委今泉英語指導職員の4名が参加 寿都中学校中村教諭が、寿都町英語教育推進会議の萬谷教授らとともに共同研究の成果を発表	
8月	4日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議	
	4日	第5回外国語教育指導者懇談会	
	9、10日	【先進校視察2】 全国英語教育学会(JASELE)第40回徳島研究大会に、寿都中学校中村教諭、佐藤美咲教諭、町教委今泉英語指導職員の3名が参加 寿都中学校中村教諭が、寿都町英語教育推進会議の萬谷教授らとともに共同研究の成果を発表	
	1日	第6回外国語教育指導者懇談会	
9月	15日～18日	【先進校視察3】 香川県直島町立直島小学校・直島中学校への視察。寿都小学校根井校長、三春教諭、潮路小学校佐藤教諭、寿都中学校中村校長、中村教諭の5名が参加	
	19日	中学校授業研修(指導主事訪問)	
	29日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議	
	2日	中学校授業研修(指導主事訪問)	
10月	14日～17日	英語指導力向上事業研修への高等学校担当教諭参加	
	20日	中学校授業研修(指導主事訪問)	
	20日～24日	英語指導力向上事業研修への中学校担当教諭参加	
	28日	高等学校授業研修(指導主事訪問)	
	10月中旬	英語検定対策	

	11日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議	
11月	17日～21日	英語指導力向上事業研修への小学校担当教諭参加	第1回北海道英語教育推進会議
	25日	第7回外国語教育指導者懇談会	
12月	2日	第8回外国語教育指導者懇談会 中学校で「英語能力判定テスト」実施	第2回寿都町英語教育推進会議(4日)
	6日	高等学校で「英語能力判定テスト」実施	
	10日	第9回外国語教育指導者懇談会	第2回北海道英語教育推進会議
	17日	第10回外国語教育指導者懇談会	
	12月中旬	英語検定対策	
	25日	寿都町小中高連携学力向上推進委員会による学校間の取組協議(CAN-DO等事業評価)	
	25日	第11回外国語教育指導者懇談会	
	1月上旬	児童英検対策	
1月	15日	第12回外国語教育指導者懇談会	
	23日	英語検定全員受験(中学校1、2年生)	
	27日	第13回外国語教育指導者懇談会	
2月	3日	児童英検全員受験(寿都小学校6年生、潮路小学校5、6年生)	第3回北海道英語教育推進会議
	4日	児童英検全員受験(寿都小学校5年生)	
	10日	英語教育強化拠点地域事業」公開研究会・講演会	第3回寿都町英語教育推進会議(24日)
	17日	潮路小学校で「英語能力判定テスト」実施	
	20日	寿都小学校で「英語能力判定テスト」実施	
	23日	第14回外国語教育指導者懇談会	
3月	2日	第15回外国語教育指導者懇談会	
【その他の取組】※あれば記入			

〈本事業担当連絡先〉

都道府県教育委員会等名	北海道教育委員会 担当 (山根祐俊)
連絡先 (電話番号)	代表 : 011-231-4111 (内線) 35-775
(電子メール)	直通 : 011-204-5771 E-mail : yamane.masatoshi@pref.hokkaido.lg.jp